

欧米の林産業視察記（5）

北 沢 暢 夫

街外れの道路両側に、比較的簡素な家が数戸固って建ててあるのに眼がついた。これは恒久住宅ではなく、おもに退職者達が余生を過ごすなどのための住宅で、税金も免除される簡易建築とのこと。なる程固定した土台も見当らず、トラックで運んで来て・無造作にひよいとそこへ置いてきぼりにした感じがしないでもない。なおこの辺は、数十年前に入植した日本人移民がかなり住みついて農業をしていたが、最近は広域耕地にしないと経営が苦しく、日本と同様過疎化現象も加わって、豊かで平安な生活も次第におびやかされる方向にむかいつつあるようだ。

登りにかかる辺りから舗装が切れてバラス道になる。幅20mほどの谷川に沿って進むうち、前方にひとときわ高い山が見えてきた。目的地レインナー山だ。富士山より616m高いというだけあって、中腹までは完全



リクリエーションに来たアメリカ人家族と

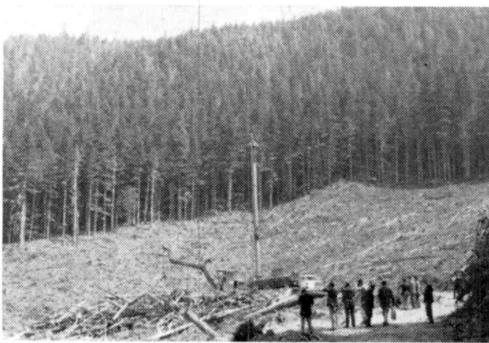
に雪に覆われた威容は、なかなかすばらしい。

おととい、ロンドンからの途次ジェット機から見た森林は、ただ黒々とした樹海の感じが深かったが、まのあたりに近寄って見るそれは、まさに見事の一語に尽きる。林道の近くは大方伐採された跡らしいが、ところどころまとめて残してある径70～80cm、高さ40～50mはあろうエンゼルマン・スプルスとおぼしき巨木には、“ホー”と見上げて溜息さえもらす程だ。

全くの林道になるあたりからはすれちがいに危険なので、会社差向けのトラックに移乗することになり 野菜サラダとハムをはさんだごっついサンドウィッチを頬張り、腹ごしらえしてからさらに林道を登り進む。標高4,000フィート。そこで下車して300mほど歩き、ようやく現場につく。この辺は樹令こそ100年を越えているが、平均40～50cmの中小径級が大半で、高さもせいぜい130mぐらい。登る途中で見たものより総体的に小粒に見える。ややゆるい斜面にそった10haほどの伐採地では、既に技払いも終り、定置式の集材機によって巻立ての最中。集材材は伐採地最上位の道路に据えられ、2・3本ずつワイヤーで機械の位置まで吊り上げられる。この伐採地の周辺は比較的手つかずの林地に見えたが、はるか下方を見渡すと、すでに伐り尽くされた皆伐跡地がくっきりと無数に点在しており、造林の進行している気配も感じられないことが



山を見る前の腹ごしらえ



集材中

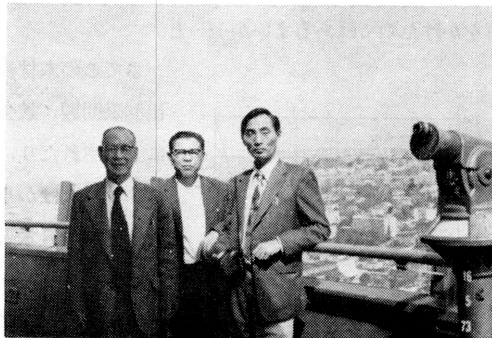
ら、よそごと乍ら不安の念を抱かさざるを得なかった。

帰途谷川べりの休息所でひと休み。いつもより早目にホテルに帰る。夕食には林さんを招き、アメリカの木材事情、とくに昨今話題をにぎわしているわが国への輸出制限問題についての所見、日本商社の驚愕的な買い漁りぶりなどの実情の一端を伺った。

5月16日(水)晴

朝、フロントからの“グッド・モーニング”のサインで眼をさましカーテンをあけると、ビルの谷間を通してはるか彼方に、昨日訪れたレイニヤ山が朝霧の中に浮んでいる。片や下界は、高速道路と市内道路の交叉点で、丁度通勤時と見え車が右往左往している。出発前の予定では、大型航空機で有名なボーイング社を訪れることになっていたが、すでに3週間近い異国での超特急旅行でいささか疲れもつもあり、荷物の整理もあることとて、出発以来初めての自由行動日に変更、各自思い思いにすごすことにした。

筆者ら数人は連れ立ってモノレールに乗車、博覧会



記念塔の展望台にて
(菊地団長、大岡氏、筆者)

記念に設置されたという終点遊園地内の記念塔に上り、展望台からシアトルの市街周辺を望見。午後は単独で、クリーニング店主ながら最近旅行者ガイドマンを兼業する通訳の迫(さこ)さんの案内で、市内で魚菜雑貨店を営んでいる一世の成沢さん宅を訪れ、移民の思い出話や趣味の詩吟について語り合う。成沢さん夫妻は明治年間山梨県から移住、はじめ開拓農家で

あったが失敗、その後今のM.K魚店を開いて成功、二世も出身地から迎えて現在は安楽にらせるようになったとか。一家の人達の語ってくれる言葉の端々から、数十年前に耳にしたであろう本来の日本語らしい日本語と清純な日本人気質を感じ、このようなことをこの土地で味わうことの意外さにびっくりした。そしてこの日本人家族が話してくれた「最近、金の力にものをいわせ、人道無視的な買占めや物価を吊り上げている日本商社マンのお蔭で、われわれ在米日本人は実に肩身のせまい思いをしています・・・。」といわれた言葉には、自身に無関係とはいえ、いささか応答に窮した。

5月17日(木)晴 シアトル ロサンゼルス

11時発ロサンゼルス行ウェスタン航空629便に乗るため・ホテルで林さんに礼をのべ空港に向う。

意外に早い出札と思いながら手荷物を下げて並んだところ、男女数人の検閲官が荷物の徹底検査。ロンドンからシアトルに着いたときも、事前通告の名簿とパスポートを見較べ念入りにしらべられたが、同じ国内でこれほど厳重にされるとは予想外で、洗面具入れ、カメラ、土産物に到るまですべて開放、中には開いた女性検閲官も見られた側も思わず赤面する品がとび出し、お互いに顔を見合せてオー！アイアムソーリー。

定時に飛び立ったジェット機の窓から、西部アメリカの景色が手にとるように見える。シアトルからポートランド間の山々は、頂上まで林道がうねうねと走り、その6割以上が伐採されている。そしてまばらに残っている森林と伐採跡地がくっきりと境界をなし、平地から曲りくねって続く林道は、あたかも果実を喰い荒した巨大な害虫の這い廻った様さえ連想させるものがある。何時ごろ伐採されたものかさだかではないが、このコースから見たかぎりでは針葉樹の宝庫といわれるこの地帯(ワシントン州)も、決して無尽蔵などとはいえない現象を呈しつつあるのではなからうかと、一抹の不安を感じた。

ポートランドで新しい客を乗せたあとは、ロサンゼルスまで着陸せずに約2時間、アメリカ大陸を空の上

から垣間見る。荒漠とし広い大陸のあちこちに点在する大小さまざまな湖沼に眼が奪われる。茶、黄、緑など幾種類かの絵具を大量に混ぜ合わせて流し込んだような、ちょっと形容にしにくい色を呈するそれら湖の水の色は、雄大さなどという感じは全くなく、一種独特な不気味さをおぼえた。一方カリフォルニアの農耕地帯らしきところは、かく境界線が数百メートルの単位で長方形に区割され、さすがアメリカの大農式の外貌をのぞかせてくれる。レーニヤ山のほか、名前はわからなかったがニヨッキ、ニヨッキと富士山に似た山がいくつか見えたのも、このコースであった。

14時12分ロサンゼルス空港着。空港に北海道庁商工



観光部より出向の中川修主査が迎えに出ていてくれ、直ちに以外中心部に近いビルトモアホテルに入り、旅装を解く間ももどかしく別室で中川主査から、アメリカ西南部を中心にした一般社会概況並びに木材産業のあらましについて説明してもらった。

アメリカ西部の木材事情

アメリカ全土における木材(素材)生産量は、1970年435億ボードフィート。このうち太平洋に面した西部地域のアラスカ、ワシントン、オレゴン、カリフォルニアの4州から228億ボードフィート生産され、これは全米の52%に相当する。また1971年の総輸出量は21億ボードフィートで、前後年に比べやや減量しているが(海員ストの影響)、絶対的に見ると上掲4州でほぼ90%を占め、さらにそれらの90%が日本に輸出されている。すなわちアメリカから国外に送り出され

る木材の8割がわが国の港に入ってくるわけで、その生産地としての4州の動向は日本の木材界に重大なかわりをもっているということになる。

ところで、1972年7月~1973年1月の間における千ポード・フィート当りFOB価格の足どりを見ると下

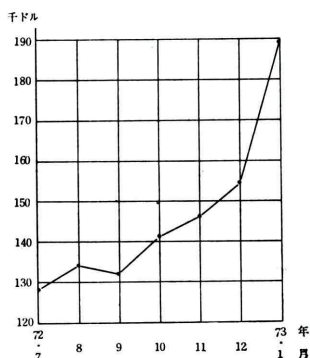
大平洋4州の輸出量

年 度	輸 出 量	
	総 量	日本向け
1970	24.7	23.7
1971	21.0	18.4
1972	27.8	25.2

単位：億ポード・フィート

図のとおりで、72年末から73年々初にかけ一きよに高騰したことによって、一部国会議員から厳しい輸出制限令発動の意見が、かなり大々的にとり沙汰される気運を醸成させるに到った。

かかる情勢を招来した背景には、原料供給量(伐採量)がほぼ一定であるのに、1971年よりアメリカの住宅産業が著しく伸びたところへ、日本の需要も併行して増加した。ドルの切下げ、円の先高を見越して、日本商社が異状高値で買い漁ったことの2点がその主要原因とされ、これに世界的なインフレ傾向が拍車をかけたのではあるまいか・・・と。



米材FOB価格の推参

さてこの木材輸出制限問題、議会上程されたり、アメリカ人ばかりでなく移住日本人間にさえひんしゆくを買う関心事に発展しつつあるが、今後果してどのような推移を辿るか、軽々には判

断しがたいこととはいえ、わが国の木材産業にとっては等閑視できない重大事であることは確かである。このことについて中川主査と王子製紙の林さんから伺ったいわば日本人側からの見解を総合すると、現段階としては一応次のような見透しが想定されるのではある

まいかと。

まず現状で強度の制限に踏みきった場合、

主要な生産、積出地域の関連業者が溢れる。

過熟木の保有が大きく、国内消費量以上に伐採せざるを得ない。

現在輸出中の原木を含めて製材する能力を、早急に補充することは困難である。

このような理由から、アメリカが木材の輸出を即刻強度に制限する可能性は少いと判断して差支えないようであるが、長期的視点に立った場合、

まず公有林(国有、州有)の伐採制限をきびしくする。

民有林についても逐次波及させる。

丸太輸出を極力制限し、加工度を上げて輸出する。

ともあれ過去、金さえ積み上げればモノは手に入るといった“エコノミック・アニマル”的な商法は次第に敬遠されようとしている今日、世界的に話題を投じている石油資源と同様、木材に関しても長期的展望の見地から、慎重かつ合理的な対策に積極的に取り組む必要に迫られている時点ではなからうか。

対談を終え、夜は団長以下全員貸切りバスで観光コースを巡回する。街のネオンと月が減法きれいだという公園の丘に登ったが、あいにく濃い霧で視界ゼロ。ただちに引き返して、美人モデルの居並ぶ有料撮影所でシャッターを切り、映画街では世界に名声を博しているハリウッド街の散策、旅の記念に本場?の映画をとっくり堪能してホテルに帰還。

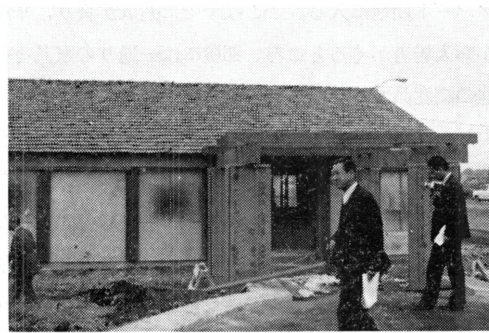
5月18日(金) 晴 ロサンゼルス住宅団地

旅行計画中で 専門的内容の視察は、今日のコースが最後である。時間的余裕があるということでホテルを9時40分に出て、アーパイン・カンパニー(Irvine Co.)に向う。今日の案内者は中川主査と長年当地に居住している室内装飾デザイナーの吉鶴光雄氏が来てくれる。この団地はロサンゼルス中心街から真南50キロのところ、一方が太平洋に面し、すぐ近くにLaguna Beach, Newport Beach, Long Beach など

有名な海浜が並び好住居地。

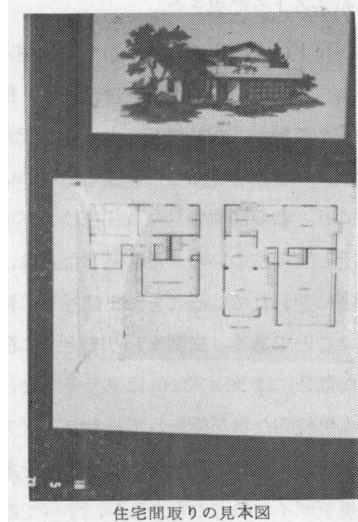
広々とした団地の入り口の一角に設けられたHome Showに到着、早速スライドで雄大な造成計画、各種住宅などの紹介を受ける。当社のこの地区における造成計画はすでに10数年前から着手され、完成は2,000年頃の予定という。団地の規模は、幅6マイル(10キロ)、長さ22.2マイル(34キロ)の広さがあり、小国ニッポンではほとんど想像できないマンモス団地である。戸数は15,000戸と比較的少いが、ゆったりした敷地内に沢山な公園、ヨット港、海水浴場、遊園地、ゴルフ場、サーキット、ショッピングセンター、学校、病院等一般市民の生活に必要なすべての施設、機能を網羅した計画が盛れたうらやましいばかりの団地である。

センターを出てバスはまず1戸建団地の造成中の現場に着く。団地全体では大小18の区割に分けられ、1



建設中の建売り住宅

戸建て、2戸建て、4戸建てとさまざまあるが、ここではもっぱら1戸建てばかりらしい。本道路から入ったすぐのところに粗雑なバラック造りの臨時事務所が設けられ、そ



住宅間取りの見本図

この内壁に区割内に建設される住宅の見本(外観と設計図)がナンバー毎に提示されている。団地内では幾つかのグループに分けられ、それぞれ型の異った家が矢つぎ早やに仕上がっている最中。専門家の吉鶴さんに造成順序を聞いてみた。区割内の建設方針がきまると上下水道、電気、ガス、外灯、道路舗装など屋外の公共設備が整備される。アパートなどでは芝生、植樹までととのえられ、次いで家屋の基礎工事にかかる。基礎コンクリートが硬化した時点で建前に入るわけであるが、普通住宅(30~50坪)では骨組みから屋根、内装仕上りまで3~4日というのにはびっくりした。材料間のつなぎはすべて釘止めで、屋根の表は桎ぶきである。それにしてもアメリカ、カナダなどの短工期の話は先頃耳にしていたが、現物を眼の前に見せられ、いささか恐れ入った。

バスは幾つかの団地を通りぬけ、今度は4戸建てのアパート団地に入る。ここはすでに造成が終り、来週から入居者がくるところ、部屋には一通りの家具その他の調度品まで備えられ、手ぶらで越して来てても不自由しない段取りになっている。居間には部厚いじゅうたんが敷かれ、3点セットもかなりのもので、高級な棟にはプールまである。あえてそのように設計されたらしい坂のある曲りくねった道路は自動車の走行は禁止されており、狭い土地にやたらと高層アパートの林立するわが国の大都市郊外とは、あまりにもギャップがあるように思えた。

以上は半ば走るようにして見て廻ったので、もちろん住宅団地の概括などとは程遠く、巨象のしつ尾にかすかに触れた程度でうんぬんなどできる柄ではないが、たまたま見聞した範囲で気のついた点を記しておこう。この団地で見た各住宅はすべて木造であった。そして視察中の一番に感じた点は、構造用材料が豊富に使われていることおよび意外に粗雑のように思えたことである。玄関まわらやとくに荷重のかかりそうな部分には30×30cmはありそうな、日本のいわゆる大黒柱的な材が使われていたり、ドアや一部の壁に鉋刃のあたらない鋸挽きのままの材をあいらうなど、新規デザインのものもあるが、すべての材の連結が釘施

工であったり、手割り桎とはいえ雨が降ったら素早くたらいを用意しなければ洪水の憂いがありそうな屋根 - もっともロサンゼルスは降雨が極めて少ない - など、台風や地震の多い日本には、あのままでは通用することはむずかしい。ただし数日を要せずに完成できる基本条件に“材料の乾燥”がある。ヨーロッパ諸国も同様建築材の事前乾燥は常識となっていたが、この点についてはわれわれも素直に取り入れるべきではなからうか。

住宅団地造成に関係の深い最近店開きしたショッピングセンターに立寄る。敷地の外周は1万台以上収容できる広い無料駐車場、その内側に幾棟もの売店がある。売店というと何か小規模で雑然とした印象を与えるが、ここの売店はいわば1棟1棟が独立したデパートと同じで、従ってショッピングセンター全体は、幾つかのデパートを1カ所に集めたデパート団地とでも形容できようか。日用雑貨から食料品、食堂、高級装飾品など並べられており、その1棟は日本の企業が占めていた。



自家用駐機場



デズニールランドの一角

ここで視察のスケジュールはすべて終了、あとは案内者に一任。13時ショッピングセンターを出て、嘶の園として世界的に有名なデズニールランドに足を向ける。この施設は、ワルト・デズニー氏の幼い頃からの宿願としていた夢の実現場で、広い畑地を買いとり、巨額の資金を投じて設備した24のさまざまなコースは、大人・小供はもちろん、幼児老人にも親しまれ、1955年創設以来すでに1億人以上の世界中の人々にその楽しさを満喫させてくれてきた。われわれには2時間程度の余裕しかなく、アメリカ各州の紹介館をはじめ5コースほどを巡るに止め、17時半ホテルに戻った。

ホテルでは帰り仕度をととのえ、(筆者は中川主査の事務所で資料を託送)19時からの中川、吉鶴両氏との晩さん会に臨んだあと、めいめい国際電話で平安な旅行を日本の家族に報告などした。

5月19日(土)日 ロサンゼルス ハワイ

9時25分発パンアメリカン航空001便に横乗するため、ビルトモアホテルを7時20分発、25分後にロサンゼルス空港に到着。予定時刻に発進、アメリカ大陸に別れを告げホノルルに向う。

滞空時間5時間少々、3時間の時差を調節して11時40分オアフ島の上空で大きく旋回したと見るや直ちに着陸体勢。空港内ミスの到着場には派手な服装の若い日本人3世の娘さんが待ちうけていて、幾分緊張がみに降立った一行1人1人にレイを首にかけてくれる。案内者らしい中年の婦人(日系二世)が流暢な日本語で誘導、小型マイクロバス2台に乗せられ、とり



ワイキキの海岸とホテル群

あえずオアフ島内の見物。

運転手は、最近日本から観光ブームに目をつけて出稼ぎに来たという若者で、日本の歌謡曲(カーラジオ)を鳴らしながら、ぐるぐる見せ場を巡回する。さすが観光の島ハワイだけあって、すべての景色が実にすばらしい。名前は記憶できなかったが、色とりどりに咲き誇っている美しい花々、長いつるにぶら下ったように実っている紫色に熟したマンゴー、どこにも見

られる実をつけた椰子の木、軒が極端に低く外観はさほどにも見えないが億単位(円)で建てられたとかいう資産家の住宅、しばしばテレビのコマーシャルなどに出てくる



カメハメハ王庁跡

ダイヤモンドヒル(ヘッド)と呼ばれる岩石だらけの小山、緑の芝生に整然と平らにしつらえられた戦士の墓、小さいながらも石造でどっしりとした感じの曾ってのカメハメハ王庁等々。そして最もハワイを象徴するであろう、汚れの全く感じられない青々と澄み切った空と海。

島内一巡のあとは、お定まりの免税店と称する観光客相手の店へ案内される。免税品といっても種類、数量は制限されているはずなのに、うっかり油断すると免税以外の品まで買わされ、入国のときにとんだ不愉快な目に逢うことがあるらしい。別な店でハワイアン踊りを見て、17時クィーン・カピオラホテルに入り、18時30分より隣りのレストランで菊地団長、筆者、伊藤社長がそれぞれの立場を代表して挨拶、解団の宣言を終えて乾杯。

ハワイ - 帰国

5月20, 21日(日~月)晴 ハワイ 羽田

グウッ・グウッという鳩の鳴声で眼をさます。カーテンを開けると、各部屋に作りつけのベランダに鳩が何羽も集ってエサをあさっている。空は何の障害もなく晴れ渡り、実にすがすがしい。

カメハメハ王庁歴代の肖像額のある食堂で朝食をすませ、帰国の準備をしてフロントに降りる。出発まで大分時間があるとて、土産物を買出しに出る者、道路向いの動植物園を見に行く者、ワイキキの浜を散歩する者など、旅行最終日も結構忙しい。浜辺では、老若男女が泳いだり、日向ぼっこで甲羅干しをしたり、海上スキーを操る人々にぎわい、自由気ままにハワイのムードを楽しんでいる。時折ザァーとやってくるスコールも、南国なればこそその風情で、この島をとりまくすべてが樂園に包まれているといった感じが満ち溢れんばかり。

14時40分迎えの車に乗り、空港で昨日買い求めた免税品を受けとり、16時55分日本航空001便でハワイを

あとに、日本の空を目指して飛び立つ。2時間程すぎた頃左手に、かつて日本海軍の命運を決した海戦をしたのぶミッドエー島が波間に浮ぶのを見ながら、1日時計の日付けを進める。

出発前旅行社の外国旅行ベテランから、「このスケジュールはきつすぎる。途中必らず何人かの故障者が出るだろう」とまでいわれた今回の計画であったが、幸い事故もなく、言葉の相通じない国々を廻りながら、一応予定のコースをすべて消化し得たことは、収穫の内容はさておき、まずは大成功といえよう。

4月28日旭川を発って今日で24日日。幾分和らいたとはいえ、旅行の緊張と興奮はまだ身体のあちこちに残っている気がしないでもない。それでも19時25分、羽田の誘導灯の青いライトに向って静かに下降、車輪が地上に着いた瞬間、やれやれといった表情でお互い顔を見合せ、一同ゆったりした足どりでタラップを降り、荷物受取り場に歩を進めた。 (完)

- 指導部長 -